

# 經濟論叢

第八十九卷 第一號

---

人事考課の改善のために……………	田 杉 競	1
一九世紀末ロシア資本主義論史 の研究序説……………	田 中 真 晴	20
ベルリン機械工業に おける労働關係(二)……………	大 野 英 二	41
西南ドイツにおける「農民解放」……	大 月 誠	61

---

昭和三十七年一月

京 都 大 學 經 濟 學 會

## 一九世紀末ロシア資本主義論史の研究序説

田 中 真 晴

## 一 は し が き

『資本論』を基礎とする一國資本主義の分析は、マルクス以後におけるマルクス経済学の展開史において、重要なひとつの分野を形づくってきた。<sup>1)</sup> とりわけロシア資本主義分析は日本資本主義分析について、われわれに親しいロシア資本主義分析といえは、ひととはだちに『ロシアにおける資本主義の発展』などのレーニンの諸労作を思い浮かべるであらう。しかし、マルクス経済学の展開という視点からロシア資本主義分析の歴史を考察するばあい、レーニンとともに逸してならないのはブレハーノフの労作、とくに『われわれの相違』(«Наша разногласия») (一八八五年)である。この書物は一部の研究者のほかにはあまり知られていないが、『資本論』(第一部)を現状分析に適用した最初の労作であり、ロシア・マルクス主義の資本主義分析における先駆的労作であった。<sup>2) 3)</sup> じっさい、この先駆的労作をぬきにしては、『発展』の学史的位を正確に認識することは不可能だといつても、あなたがち云いすぎではないと思われる。わたくしは以下の一連の論稿において、『われわれの相違』と『発展』とを二つの焦点にして、一九世紀末ロシア資本主義分析史を学史的に考察したい。

本稿はそのための序説である。ここでは『われわれの相違』の内容そのものには立ちいることなく結論だけを先取する。また、ブレハーノフの思想の成長転化をそのうちがわから追跡して『われわれの相違』に至る方法をひとまずおいて、そのかわりに、ロシア資本主義論史の(仮設的な)段階区分をおこなない、『われわれの相違』以前のロシア資本主義論の要点を紹介し、『われわれの相違』の成立の前提について若干の理解をえておきたい。

(1) 『資本論』以後のマルクス経済学の展開史を研究するばあいの方法論の問題については、拙稿「レーニンの市場理論について」(『経済論叢』七四巻五号)、「レーニンの帝國主義論」(『経済セミナー』一九六〇年五月号付録)を参照。

(2) 『われわれの相違』についての詳細は次稿に述べるが、この書がともすれば看過されがちであったのは、つぎのような事情によると考えられる。(1)ジュネーブで印刷、ロシアへは非合法文書として持ちこまれ、一九〇五年に『ブレハーノフ選集』第一巻のなかに復刻されるまで、希観書であったこと。(2)レーニンはこの書を高く評価していた(『レーニン全集』第一巻一九四一九五、二二三頁を参照)が、『発展』においては、おそらく合法的文献としての出版に意を配ったためであろう、非合法文献たるこの書にはまったく触れていないこと。『発展』にはそのかわりに合法的文献たるブレハーノフ「ヴァロンツォフ(マホ・ヴュ)氏の諸著作におけるナロードニキ主義の基礎づけ」(『Обоснование народничества в трудах Г. Воровцова (В.В.)』1896. が引用せられているが、この著作の学史的意義は『われわれの相違』にくらべてはるかたにすくない。(3)ソビエトでは、ブレハーノフのその後の反ボルシェヴィキの立場が、かれの初期の著作をも過少評価させる傾向を産んだし、欧米の一部ではブレハーノフがストループのかげにかくされる傾きがあった。ソビエトの通史のうちではポクロフスキが『われわれの相違』の意義をたかく評価した(岡田宗司訳『ロシア史』二七五—八五頁を参照)が、旧『党史』では言及されていず、新『党史』ではかんとんに指摘されているにすぎない。

ブレハーノフの経済思想の研究文献として最も重要なものは、Бровер, И. М. Экономические взгляды Г. В. Плеханова, 1960. である。ほかには Поняцкий, Ф. Д. Экономические работы Г. В. Плеханова, 1960; Экономические взгляды Плеханова, 1956. があるが、前記ブローヴェルに及ばない。欧米ではバロンが一連の手紙と論文をまとめている。Baron, S. H. Plekhanov on Russian Capitalism and the Peasant Commune, 1883-1885, in American Slavic and East European

- Review, Vol. XII, Dec. 1933, ditto, Plekhanov and the Origins of Russian Marxism, in Russian Review, Vol XIII, Oct. 1954, ditto, The First Decade of Russian Marxism, in A. S. E. R. Vol. XIV, Oct. 1955, ditto, Plekhanov's Russia: the Impact of the West upon an "Oriental" Society, in Journal of the History of Ideas, Vol. XIX, Jun. 1958.
- (3) プレハーノフは戦前のわが国では、マルクス主義哲学のすぐれた祖述家として紹介せられ、『マルクス主義の根本問題』(恒藤恭訳一九二一年)をはじめとして、とりわけ一九二六—三三年ごろに、をかんに翻訳が刊行された。筆者のしらべた限りでも、戦前の訳書は、同一原典の異種訳をふくめると、十五を超えている。じつざいにしたのは一部に終わったが、『プレハーノフ十卷選集』(渡文閣、一九二七年ごろ)さえ計画せられた。それら戦前の訳書は哲学を中心に、文学・社会思想にわたっているが、経済関係のものはない。竹尾式訳『われらの対立』(改造文庫、一九三二年)は、実は『社会主義と政治闘争』(Сопоставление и политическая борьба) 1883. の訳である。検閲を顧慮して匿名をすりかえたのであろう。戦前のプレハーノフ翻訳は一九三三年ごろを最後に、弾圧下に姿を消した。戦後には、戦前の訳書のいくつかが改訂されたほか、『歴史における個人の役割』の訳が二種(西牟田久雄・直野敦訳、未来社「社会科学ゼミナール」、木原正雄訳、岩波文庫)、石川郁男訳『ロシア社会思想史序説』(未来社)が刊行された。

戦後、わが国にもロシア史・ロシア思想史研究の気運がたかまってきて、プレハーノフに関する論文があらわれはじめた。中村義知「一九世紀後半における農民共同体とゲ・ヴェ・プレハーノフ」(『政経論叢』七卷一・二号)はナロードニキの時期のプレハーノフの労作を、「一九世紀ロシアの思想的伝統とプレハーノフのイデオロギー的転向」(同七卷三号、八卷一号)は『社会主義と政治闘争』および『われわれの相違』の一部を、社会思想史の視点から紹介している。ほかにも荒又重雄「プレハーノフとプロレタリアートのヘゲモニーの思想」(『スラヴ研究』四号)、和田春樹「プレハーノフおぼえがき」(『ナウカの窓』六卷一〇号)がある。

## 二 一八七〇年代——二つの道の可能性の思想

ロシアにおいて、資本主義の発展が現実に行進しつつある過程の問題として認識されたのは、農民改革の後、一

八七〇年代のはじめであつた<sup>1)</sup>。もとよりロシアの「西欧化」の試みはビョートル一世の改革にまでさかのぼるし、ロシア社会の胎内に資本主義的ウクラードが育ちはじめたのは、農民改革以前である。また、ゲルツェン、チェルヌイシェフスキイらが、西欧文明の一定の成果を導入する必要を認めながらも、土地共同体を基礎とする、ロシアの独自の発展の道を説いたとき、そこには資本主義批判とすんではブルジョワ経済学の批判がふくまれていた。しかし、その批判は、ロシア資本主義ならぬ西欧資本主義を対象としての資本主義批判であり、ロシアの将来が西欧的コースをたどらないようにとの、前もつての警告であつた。ロシアにおける資本主義の発展、ロシア社会の資本主義化ということが、現実の過程の問題として意識せられるようになったのは、いま述べたごとく一八七〇年代の初頭、問題の提起者はナロードニキであつた。あたかも、ナロードニキ主義というものがともかくも定着するのがこの頃である<sup>2)</sup>。ナロードニキ主義は、反農奴制とともに反資本主義のスローガンをその標徴としており、資本主義の一定の発展を基盤としてはじめて姿をととのえたといえよう。

さて、最初の問題提起者は、ナロードニキのうちでも『祖国の記録』を中心とする、いわゆる自由主義ナロードニキ<sup>3)</sup>、とくにミハイロフスキイとエリセーエフであつた。一八七〇年代の初頭は、経済史上においては、ロシアにおける資本主義の最初の高揚期として知られている。鉄道建設の急テンポでの進行、国立銀行を先頭とする信用組織の発展、株式会社創設ブームなどの一連の事象、そしてツァーリズムが自由主義経済学の信奉者レイテルンを大蔵大臣に据えて（在任一八六二—七八年）、私企業の振興に熱心であつたことが、かれらの注意をひいた<sup>4)</sup>。ミハイロフスキイは第一回全露工場主会議（一八七〇年五月）の速記録を讀んで、「共同体的土地所有とイギリス流の大工業とは長くは共存できない<sup>5)</sup>」として、資本主義的大工業の普及に反対し、エリセーエフは、当局の株式会社設立法案

を批判して一連の論稿を書いた。<sup>6)</sup> ミハイロフスキイはいう、「現在、ロシアの前には二つの道がある」「そのひとつは、現に実利的な観点によって承認されている、きわめて簡単に安穩な道である。すなわち、税率をひきあげ、共同体を解体させよ、たしかにそれだけで十分だ——そうすれば工業はイギリスにおいてのようになり、雨後のたけのこのごとく成長するだろう。だが〔同時に〕工業は労働者を喰ひ、収奪するにちがいない。……いまひとつの道は……労働と所有の現在との関係を発展させることにある。いうまでもなくこの目的は、国家の広汎な介入なしには達しえられないのであつて、土地共同体の法的確保こそはその第一着手でなければならぬ」と。

西欧とロシアとの相違に注目し、共同体を基礎とする社会主義あるいは共同体から社会主義への直接的移行の可能性を信じることは、ナロードニキ主義の思想的核心であり、右の引用文の基礎にあるのもこの思想である。<sup>5)</sup> しかし、著者はロシアでは資本主義は根づかないとか死産の運命にあるなどと云っているのでは決してない。たしかに、著者はロシアにおける資本主義を「西欧資本主義のロシアへの移植」と考えてはいる。しかし、移植にせよ、資本主義がロシア社会の全体をつかむ濃厚な可能性があると考へていたのであつて、その現実化の危機を感じとつてゐること、すなわち、資本主義化と共同体を基礎とする社会再建との二つの道の岐路にたつてゐるといふ現在の意識、ここに著者の、ひいては七〇年代ナロードニキのロシア資本主義論の一つの特徴がある。(この点、八〇年代におけるロシア資本主義没落論との間に質的な相違がある。後論参照)。

さて、ミハイロフスキイ、エリセーエフらのロシア資本主義論は、『祖国の記録』誌に拠るひとびとだけにとどまらず、いわゆる革命的ナロードニキに対しても影響を与へた。革命的ナロードニキの運動は、一八七〇年ごろにおける諸サークルの形成にはじまり、「人民のなかへ」の高揚(一八七三—七四年)を経て、「土地と自由」団への

大同團結（一八七六年）、やがて「土地と自由」団の「人民の意志」と「黒い割替」への分裂（一八七九年）という過程をたどったが、かれらは、ツァーリズムを打ち倒すならば、資本主義的發展という迂路を通らずに社会主義に達しうる、と考えていた。かれらは、ツァーリズムに政策転換を要望するのではなく、ツァーリズムの打倒によってのみロシア社会の再生がありうると考える点において自由主義ナロードニキとちがっていたが、ロシアはまだまだ資本主義の道に入りこんでしまつてはいないと判断する点においては、自由主義ナロードニキの見解と一致していた。プレハーノフは七〇年代には革命的ナロードニキのすぐれた理論家であったが、そのかれは「わが国の農民の大部分が土地共同体を保持しているかぎり、わが国は資本主義的生産が前進途上の不可避的段階となるような、かの法則の道を歩みだしたと考えることはできない」と書いていた。ある社会がひとたび資本主義的再生産の軌道に入りこんでしまえば、そのばあいにはその社会は資本主義的發展の諸段階を経過することなしには社会主義に達することができなくなる。「マルクスにとつて観察の対象という役割を具した、西ヨーロッパの諸社会はいつこの宿命的軌道におちこんだのか。それは西ヨーロッパの共同体が崩壊したときのことであつたと、われわれには思われる。」<sup>10)</sup>これに反して、土地共同体がなお社会経済の基盤をなしているロシアは、いまだ「宿命的軌道」におちいつてはいない——これがプレハーノフの考えであつた。

七〇年代のナロードニキの、ロシア社会の現状認識の全体という点からみると、資本主義化の問題はひとつの新しい問題ではあつたが、かならずしも中心問題ではなかつたし、また資本主義的な生産関係がそのものとして抽出・分析せられたのではなかつた。かれらは、農民経営・農村共同体の危機の原因を、なによりもまずツァーリズム・地主・商人・クラークによる搾取にあると考え、農奴制の残基とブルジョワ的要素を一括して、反人民的な

るものとして批判した。かれらはロシア社会の基本的な階級対抗を、「強慾な国家と喰いものにされてゐる人民」という「二つの和解できぬ陣営」の対立として理解し、国家の側にはツァーリ、宮廷貴族、地主、工場主、商人、クラークを、人民の側に農民と都市労働者を属させている。<sup>11)</sup>このような階級対抗の図式は、反農奴制と反資本主義とが未分離的に一体をなしていた、かれらの思想をあらわしている。そしていづれかといえば、かれらの批判は資本主義よりも農奴制遺制にヨリ多く向けられていた。——資本主義の問題が農奴制遺制の問題と未分離的に一体化し、あるいは後者に対して副次的な地位を占めがちであったこと、ここに七〇年代の資本主義論のいま一つの特徴がある。

マルクス・エンゲルスのロシア論を詳述することはできないが、七〇年代ナロードニキのロシア資本主義論との関係において、すこしく述べておかねばならない。なぜなら、マルクスがロシア問題についての意見を定式化したのは一八七七年（『祖国の記録』編集部への手紙）、エンゲルスは七五年（『ロシアの社会関係』）であつて、かれらの論稿はナロードニキに影響を与へたし、またそれ自体、七〇年代のロシア資本主義論の重要な一翼をなしているからである。<sup>12)</sup> つぎに主としてマルクスの説の要点を記すが、それが七〇年代ナロードニキのロシア資本主義論を支持する面をつよくもつていたことは、注目されるべきである。<sup>13)</sup>

(1) 『資本論』があたかもロシアの資本主義化の必然性を論証する典拠でありうるかのように解されることを、マルクスはきびしく拒否した。「原始的蓄積の章は、西ヨーロッパにおいて資本主義が封建的経済制度の胎内から産れてきた経路を示そうとするものにすぎない。……私の批判者は、この歴史的素描からなにをロシアに適用できるであろうか。それはつぎのことだけである。すなわち、ロシアが西ヨーロッパ諸国民の手下にならつて資本主義

的諸国民にならうとしても……ロシアはその農民の大きな部分をあらかじめプロレタリアに転化することなしには、その目的を達しないであろう。そして、ひとたび資本主義制度のふところにいだかれたならば、他のふつうの諸民族と同じように、そのかしゃくの法則に従わせられるだろう。それだけのことにすぎない<sup>14)</sup>」別の機会にかれば『資本論』に引用されている分析は、ロシアの共同体の生命力にかんする贅言<sup>14)</sup>の議論に対しても、その論拠を提供しない<sup>15)</sup>ことを確認し、『資本論』(第一部。第二部以下は當時は未刊)は資本主義の起源を「自分自身の労働にもとづいた私有」の「資本主義的私有への転化」の運動として叙述しているのに、ロシアは耕作地の共同体的所有という「古代的形態」を保持しており、西ヨーロッパ的運動の始発点たる「自分自身の労働にもとづいた私有」の基礎がいまだに実在していない、と述べている。

(2) マルクスはロシアの資本主義化過程を否定してはいない。しかし、ロシアの資本主義的發展を、西ヨーロッパの資本主義とは異った型のものとして把握している。「国家を仲介として農民の負担によって養われている、ある類型の資本主義 un certain genre de capitalisme が、共同体に対立してそびえている」<sup>15)</sup>「農民の負担と犠牲において、国家は西洋の資本主義制度の諸部門を温室のなかで成長させた」<sup>17)</sup>「指導的資本主義諸国家の鉄道網の擡頭は、資本主義がまだ社会のわずかの上層にかざられているような諸国家においてさえ、きわめて短期間に資本主義的上部構造をつくりだした」<sup>18)</sup>と。マルクスは勿論、ロシアの共同体の危機的様相を認めている。そして、ロシアの共同体の現在の危機は、農民改革以来の「外部からの諸抑圧」(国家ないしは国家を媒介とする資本主義による)が共同体の内部矛盾の展開を激発したところに生じたというのが、かれの見解であった。すなわち、「土地の共有と分割経営」という共同体の二面性・内部矛盾は、動産が農業において重要な役割を果すようになるにつれて、

「共同体の構成員の財産をますます分化させ……共同体のなかに利害の対立をおこさせている」のであるが、その過程を激成しているのは農民改革後の「国家の財政上の苛斂誅求」であり、共同体は今や「その生命が危うくなっていることを、なにびともかくすことができない」有様に陥つてゐる。そして、ロシア・ブルジョワジーは国家を媒介として共同体を搾取しているだけでなく、結局においては「共有を廃止し、農民のうちの、多少とも生活のゆたかな少数者を農村の中産階級にしたあげ、大部分のものを……プロレタリアートに転化させる」<sup>19)</sup>ことを狙つてゐるのだ、と。

(3) だが、マルクスは現在においてはなお、「共同体がロシアにおける社会再生の自然的拠点である」ことを積極的に認め、共同体から社会主義への直接的移行の可能性を肯定する。ただし、その可能性は、たんにロシアの特殊性のうちにあるのではなく、ロシアの共同体が西欧資本主義と同時に並んで存在するという、世界的現実のなかに与えられているのであって、その可能性が現実転化するためには「ロシア革命が西ヨーロッパにおけるプロレタリア革命の合図となり、そうして二つの革命が相互に補いあう」<sup>20)</sup>ことが必要である。マルクスのロシア論が、このように国際的・世界的な視野に立っている点、ナロードニキにありがちなロシアの独自性理論の狭隘さを帯びていない点、そのことには十分注意しなければならぬし、マルクスのロシア論と七〇年代ナロードニキを鼓舞するものが完全に一致するとは勿論いえない。にもかかわらず、マルクスのロシア論が七〇年代ナロードニキを鼓舞するものをもっていただけは、もはやくり返す必要がないであろう。事実、マルクスのロシア論は七〇年代のナロードニキに影響を与え、ひとつの権威的見解としてかれらによつて引用せられた。さきに触れたブレハーノフの意見は、ナロードニキ的信条に抵触することなしに、マルクスから学んで成つたのであつた。

さて、右に述べたマルクスの見解は、マルクスがその死（一八八三年）にいたるまで変わることもなく抱き、エンゲルスが大綱的には同調していたところであった。しかし、マルクスの死後を生きたエンゲルスは、ロシアにおけるマルクス死後の事態の展開を觀察し、「ロシアでは資本主義的生産様式のいつさいの基礎がきざされた。そしてそれとともに、ロシアの農民共同体の根幹にも斧がむけられた」という新しい見解に達した。エンゲルスが旧見解からこの新見解に転じたのはいつであったか。正確な時点を云いあてるとは難しいが、私がしらべた限りでは、書簡では一八九一年以降、論稿では右の引用文をふくむ『ロシアの社会関係』へのあとがき（一八九四年）においてはじめて、新見解を見出すことができる。そうだとすればあらかじめここで一つのことを指摘しておくことができる。すなわちプレハーノフが『われわれの相違』（一八八五年）において、ロシアがすでに資本主義の軌道に入ったと判断し、その認識のうえにプログラムを作成したとき、それはマルクス・エンゲルスのロシア論のたんなるふえんではけつしてなかった。プレハーノフの仕事は、ナロードニキ的ロシア資本主義論からマルクス主義的ロシア資本主義論への移行であつただけではなく、マルクス主義のロシア資本主義論それ自体におけるひとつの旋回点をなしていることがそれである。

(1) 以下、一九世紀末ロシア資本主義論史を一八七〇—一九〇〇年の期間に限って考察することについて。もとよりロシア資本主義論は一九世紀でおわるのではない。第一革命期およびそれ以後において、ロシア資本主義に関するレーニンの重要な著作があることは周知のとおりである。しかし、問題の焦点および論争の担い手の点で、ほぼ一九〇〇年を境にして変化がみられるので、とくに一九世紀末ロシア資本主義論史を当面のテーマとするのである。一八七〇年代初頭を起点としたのは、Карпачев, Н. К. 著 (Народническая экономическая история, 1958. の序文および История русской экономической мысли, т. II, ч. I, 1959. の一五章)。ただし、一八七〇年以前にも、ロシアの資本主義化に関する若干の現実認識がありはした。

Vgl. Tuzan-Baranowsky, *Geschichte der russischen Fabrik*, 1900, SS. 319-370, 589-626. 山本敏「一九世紀後半のロシアにおける（資本主義）論争」『スラヴ研究』三号、（一九五九年）は一八五〇—一九〇年代を対象としている。この論文はロシア資本主義論史におけるナロードニキ側の認識の紹介をふくんでいる。ただし、ブレハーノフの八〇年代の業績に触れることなく、またロシア資本主義論史の段階設定は試みられていない。

- (2) イタリアのナロードニキ研究家ヴェンチュリは、一八四八年革命およびその帰結としての反革命が、ナロードニキ主義思想の源流（ゲルンシェン、チェルヌシシェフスキイ、バクーニンら）に及ぼした決定的影響を強調し、四八年をナロードニキ主義の始点としている。しかし、かれは同時にナロードニキ主義 *Народничество* という言葉が一八七〇年ごろにあらわれはじめ、一八七〇年以前は厳密には「前ナロードニキ主義」*Pre-Populism* というべきである、と述べている。Venturi, F., *Roots of Revolution*, 1960, pp. xxxii-xxxiii.

- (3) ソビエト文獻では、レーニンにならって、ナロードニキを革命的ナロードニキと自由主義ナロードニキとに区別することが、一般的におこなわれている。そのさい、革命的ナロードニキとは、(1)一八六一年改革を反人民的なものと考え、ツァーリズムの打倒によってのみ人民の解放（共同体を基礎とするロシア社会の再生）がありうるとし、(2)「人民の中へ」などの実践活動（非合法活動をふくむ）に従事したひとびと。自由主義ナロードニキとは、(1)一八六一年改革を肯定し、ツァーリズム体制の内部での改善（共同体の擁護）を考案し、(2)合法誌に拠る評論活動にとどまり、非合法の実践活動に入らないもの、である（*Dr. Kapanen, H. K. Народничества истреблениа 60-90-х годов XIX века. Народничества экономическа истреблениа, стр. 14-20*）。以上二つの基準はほぼ相おおうとしても、厳密には同一でない。なお、これまたすでに指摘されていることであるが、七〇年代においては自由主義ナロードニキと革命的ナロードニキとは、ときにその境界づけがむづかしいほどに、近い関係にあった。たとえばミハイロフスキイは「祖国の記録」誌——それ自体しばしば当局の弾圧を受けた——の編輯部の中心人物であったが、非合法活動にも接触をもち、それを援助していた。自由主義ナロードニキ（＝合法的ナロードニキ）がほんとうに反革命的性格を帯びるのは八〇年代以後である。

- (4) 農民改革以前には、株式会社数は七八であったのが、一八七三年までに三五七社が創設され、株式資本総額は一〇〇倍以上に増加。鉄道建設は一八五七年に発足していたが、一八七〇年を中心とする十年間に鉄路の大幅な新設をみた。そして、鉄道

会社その他諸会社の株式取得の有力な一つの資金源は、「土地つき解放の代償」として地主が政府から取得した買戻金（＝資本化された封建地代）であった。Lushchenko P. I.: History of the national economy of Russia, 1949, pp. 489-91, pp. 386-94. 「一八六三—七一年の十年間に地主は七億七二〇〇万ルーブルを買戻し支払および土地売却によって取得し、そのうちの相当部分が新設の株式会社で流れこんだ」(Ibid. p. 490)

(5) Михайловский Н. К., Русский рабочий вопрос на съезде промышленников, 1872. Народнический экономический литература (2-й Н. Э. Д. 2 卷記), стр. 176.

(6) Гипсов Л. З., Теория социальное вопроса: Прогрессивия и ее основы: Крам современного съезда, или проект Наказания об английских обществах.

(7) Н. Э. Д. стр. 175.

(8) ミハイロフスキイは右の引用文のすぐ前の個所をこのように語っている。「労働者問題はヨーロッパでは革命的問題である。ただし、それは労働条件の労働者の手への移管を要求しているから。労働者問題はヨーロッパでは保守的問題である。ただし、ロンドンでは労働者の手中に労働条件が保持されること、現在の所有者たちに所有権が保証せられることだけが要求せられるからである」(Н. Э. Д. стр. 174-75) ミハイロフスキイはブルジョア、ルイ・ブロンなどのフランス社会主義の思想を身につけていた人物で、とりわけマリ・コンスタン後の反動の勝利をみて、西欧に絶望したのである。 Cf. Billington, J. M.: Mikhailovsky and Russian Populism, 1958, pp. 67-75.

(9) Пеханов, Г. В., Элементы экономического развития общества и задачи социализма в России, 1879. Соч. т. I, стр. 59.

(10) Там же, стр. 59.

(11) История русской экономической мысли, т. II, ч. 1, стр. 422. ナローマンキはかならずしも都市労働者を軽視したのではなく、たとえばナローマンキ時代のマンチントンには「都市労働者は……もっとも活動的な、もっとも燃えやすさ、もっとも革命化しやすい住民」であるとして「来るべき社会変革におけるその役割」を高く評価していた。ただし「都市労働者は「工場出稼者」になっている農民、すなわち農民の一分岐」「農民そのものの一部」として理解され——このこと自体、ロマノフ時代の現実を反映している——の意味をおぼえて人民＝農民であった。Пеханов, там же, стр. 69-70. 和田泰壽「土地と民

由〈主義の革命理論〉(『歴史学研究二四一号』)を参照。

- (12) マルクス・エンゲルスのロシア人との交際およびロシアについての発言は一八四〇年代にさかのぼるが、かれらがロシアに對して本格的な関心をもつたのは、クリミア戦役・農民解放を契機としてであった。エンゲルスは五〇年代にロシア語を習得、マルクスは一八六九年末以降、ロシアの原典的研究に入った。Vgl. Karl Marx, *Chronik seines Lebens in Einzelzügen*, 1934, S. 285. マルクスのロシア研究は晩年におけるかれの視野の拡大の重要な一環として注目すべきであるが、『資本論』の地代論に利用されるはずであったロシアの土地所有形態の研究は未完におわり、ロシアは『資本論』においては鉄道関係の注その他でこそしく言及されているにすぎない。ミールの問題を契機としての、共同体にまつてのかれの成熟した思想はウエマ・ザスリッチあて書簡草稿のなかた含蓄的なかたまで述べられた。Vgl. Marx-Engels Archiv, Bd 1, SS. 309-42. ロシア文献のマルクスの抜書きと評註は *Архив Маркса и Энгельса*, т. XI, XII, XIII. に収められている。マルクス・エンゲルスのロシア論関係論稿の集成として P. W. Blackstock, B. F. Heselitz 共譯の *Karl Marx and Friedrich Engels, The Russian Menace to Europe, 1953* がすべし。

- (13) マルクスとエンゲルスのロシア論は、あつうは同一とみなされているが、筆者の知るかぎりでは、Schwarz, S. M., *Populism and Early Russian Marxism on Ways of Economic Development: in Continuity and Change in Russian and Soviet Thought, 1955*, だけが、マルクスとエンゲルス内部からの自立的変革の思想がある。このエンゲルスはそれがなつて、両者のちがいを主張している。op. cit., pp. 48-53. さくなくとも、マルクスのほうがロシアに「より内在化」、ロシアの運動に對してより共感的であつたといふことはほんとうだと思われる。

- (14) 『祖国の記録』編集部への手紙「マル・エン選集十三卷一七六—一八二頁」。

- (15) 「マルクスのウエマ・ザスリッチへの手紙、一八八一年三月八日」*Marx-Engels Archiv*, Bd. 1, SS. 341-42. マル・エン選集十三卷二二四—二六頁。

- (16) 「マルクスのウエマ・ザスリッチへの手紙、草稿」*Ibid.*, S. 334. 訳書二〇五頁。

- (17) 「ウエマ・ザスリッチへの手紙、草稿」*Ibid.*, S. 327. 同一九六頁。

- (18) 「ダニエリソンの手紙、一八七九年四月十日」*Die Briefe von Karl Marx u. Friedrich Engels an Danielson, 1929*,

S. 21 f. 同三三一—三三二頁。

(19) 「ヴェラ・ザスリッチへの手紙」草稿(1) Marx-Engels Archiv Bd. 1. SS. 327-38. 同一九六一—九八頁。思うに、世界的な視野からロシアの近代を問題とするばあい、マルクスのロシア論は、世界的環境のなかでのロシアを見ている点で、またロシア資本主義の類型的特質を重視している点で、今日でも大いに示唆的である。その点ではブレハーフ、レーニンのばあいはロシアは資本主義化しつつあるという一点の論証に集中して、ヨリひろい視野からの類型の問題が失われた、すくなくとも後景にしりぞいた。

(20) 「共産党宣言(ロシア語版への序文) (一八八二年一月) Manifest der kommunistischen Partei, Dietz Verlag, 1953. S. XVI. マル・エン選集二卷五三—六頁。

(21) マル・エン選集十三卷一六六頁。

(22) Die Briefe von Karl Marx u. Friedrich Engels an Danielson, 1929. に拠ると、一八九一年十月二十九日付け書簡においてはじめて、ロシアの現状を、「大工業のための国内市場の創出過程」として位置づけ、「一八二〇—四〇年代の中央および西ヨーロッパ」に比肩している。Ibid. S. 35. 九二年三月以降の書簡では共同体に望みをつなぐことの空想性を指摘し、同年九月一七日書簡において「資本主義が新しい展望と新しい希望を開いている」ことに眼を向けよ、と述べている。Ibid. S. 71.

### 三 一八八〇年代——ロシア資本主義没落論

一八七〇年代には、ロシアがいまだ決定的には資本主義の道に入りこんではいないと考える点において、ロシアの前には資本主義化の道と共同体を基礎とする社会主義への直接的移行の道という二つの道(可能性)があると見る点において、ナロードニキとマルクスとの間に基本的な見解の一致があった。すくなくとも、抜きさしならぬ矛盾や対立はなかった。そして、ナロードニキの内部においても、自由主義ナロードニキと革命的ナロードニキとは思想的・実践的に比較的近しかった。ところが一八八〇年代になると、一八八一年三月一日の「人民の意志」党に

よるアレキサンドル二世暗殺後の反動体制の強化、革命的ナロードニキの混迷・分裂という局面を地盤にして、明確に非革命的ないしは反革命的な型の自由主義ナロードニキの思想が擡頭し、浸透していった。<sup>1)</sup>ロシア資本主義没落論は、社会思想的にはこの流派の経済思想である。そして、このロシア資本主義没落論を真向から批判し、ロシアの資本主義化の確認を基礎として、ロシアの革命運動をマルクス主義の路線に乗せようとしたのがブレハーノフであった。ナロードニキ⇨ロシア資本主義没落論、マルクス主義⇨発展論という対立図式は、そのときにはじめてあらわれた。しかもこの対立図式は、九〇年代に論争がいつそう大きな規模で再燃したときにも、変ることはなかった。八〇年代はロシア資本主義論争の第一階梯、九〇年代はその第二階梯と名づけられえよう。<sup>2)</sup>

さて、八〇年代の初頭にロシア資本主義に関する二つの注目すべき労作があらわれた。ひとつはペテルブルクの相互信用組合の会計士で『資本論』の露訳者として著名なダニエリソン Н. Даниельсон (筆名⇨コライ・オン。一八四八—一九一八年)の論文「改革後におけるわが国の社会経済概説」《Очерки нашего пореформенного общества. едного хозяйства》(『スローヴォ』誌、一八八〇年)いまひとつは、貴族の出身でゼムストヴォに七年間勤務したのち社会経済問題の評論家になったヴォロンツォフ В. П. Воронцов (筆名⇨ヴェ・ヴェ。一八四七—一九一八)の著書『ロシアにおける資本主義の運命』《Судьбы капитализма в России》(一八八二年)である。没落論として典型的なのは後者であるが、その論旨は次稿において述べる機会があるので、ここでは重複を避けて、ダニエリソン論文について八〇年代ナロードニキのロシア資本主義論の特徴を見よう。ダニエリソン論文は、農民改革後のロシア経済の構図を、統計資料を駆使してはじめて描いた試みとして、ロシア資本主義論史において注目されるべき労作である。そして、発表当時においては、むしろ中立的な実証的労作として高い声価をえたのであった。<sup>3)</sup>しかし、そ

れがヴォロンツォフの著書のような全面的没落論ではないにしても、やはり一種の没落論、いわば陰微な没落論であることは、つぎの論旨から知られるはずである。<sup>4)</sup>

——ダニエリソンは、農民改革後のロシア経済を、生産者自身が生産手段を所有する生産様式と、生産者と生産手段との分離を特徴とする資本主義的生産様式との、共存と闘争として理解する。かれによれば一八六一年の農民改革の「勅令」は「資本を土地に適用することに反対するために……生産者に労働手段（土地）を与えた」しかるに改革後の「国家の経済活動は資本主義に寄与した」<sup>5)</sup>のである。かれは、ロシアにおける鉄道建設の進展、鉄道會計とその国庫に対する意義、信用制度・公債の発展、商品流通の増大などを、くわしい数字をあげて跡づけ、「二つの経済形態の闘争」において「資本主義の潮流が、あきらかに打勝っている。すべての資料は、生産者のますます多くの部分が収奪されつつあることを、われわれに信じさせる」という。この点では、ダニエリソン論文は、ロシア資本主義没落論というよりも、むしろロシア資本主義発展の裏証的叙述でさえある。しかし論文は同時に、ロシア資本主義がゆきつまりつつあるという主張をその裏面にもっている。すなわち、著者によれば、ロシアの穀物産出量は年度ごとの豊凶を捨象すると、七〇年代を通じてほぼ一定であるのに、商品に転化されて生産者（農民）の手から奪われてゆく穀物量は七〇年代の間に増大した。その結果、人民（農民）の消費生活は量的にも質的にも悪化し、農民経営は危機的様相をふかめてゆき、農業生産力はむしろ低下しつつある。<sup>7)</sup>アメリカの資本主義がアメリカ農業の生産力を飛躍的に増大させたのとは反対に、ロシア資本主義は農業をむしろ疲弊させた。<sup>8)</sup>ところが、ロシアのすべての経済活動の水準は、窮局的には穀物生産の水準によって規定せられており、<sup>9)</sup>穀物産出量の停滞ないし減少傾向は商品化する穀物量を制約し、資本主義的活動を鈍化させざるをえない。「最近数年間の経済動向」は

「鉄道運送の商品量の減少」など「すべての資料が流通機構の弛緩を証明している」そして、いま「恐慌がいかなる形のものであるかを予言することはできない」が「恐慌の接近をさし示す数多くの現象を算えることができる」のである。——ダニエリソン論文はこのように、農業生産力の停滞ないし低下ということのうちに、ロシア資本主義のくらしい未来を予想したのであった。

以上のかんたんを紹介を手がかりにして、ダニエリソン論文にみられる八〇年代的認識の特徴というものを考えてみると、さしあたりつぎの二点を指摘することができるであろう。

第一点。七〇年代の「二つの道」の思想（資本主義の回避可能性の思想）は、ダニエリソンにおいても受けつがれている面がありはする。かれがツァーリズムの政策転換（非資本主義化政策の採用）を要望し、そこにロシアの希望をかけているのは、ロシアはまだ決定的には資本主義の軌道に入っていないという判断に基いているとも云えよう。しかし、ダニエリソン論文は、割り切つていえば、ロシアの前途に二つの道を認める七〇年代の見解とは異つて、ロシアは資本主義の道を歩いてきたが、この道は行きづまりらしいと主張するところにその特徴がある。七〇年代のナロードニキはロシアの資本主義化に反対はしたが、ロシアの資本主義は失敗するとか没落するなどと考へてはいなかつた。しかるに、八〇年代には、ロシア資本主義の進行についてのいつそうすんだ事実認識とともに、ロシア資本主義没落の思想があらわれたのである。

第二点。七〇年代においては、さきに述べたように、農奴制の残基こそが主たる問題で、資本主義はいわば副次的な問題であり、また前者と後者とが関連したものととして取りあげられることが多かつた。ところがダニエリソンは、もつぱら資本主義の問題を正面に据え、その反面、農奴制の残基の問題をほとんど完全に捨象した。しかもこ

の拾象は、問題意識からの脱落にもとづくか、あるいは重要度を軽くみたことによるのであって、第一次接近における自覚的を方法的拾象といったものではない。かれは、農民の土地不足（農民改革における切取地の問題）買戻し金、重税など——これらは七〇年代ナロードニキがもつとも重視したところである——が農民経営を圧迫していることを認めはするが、農民経営の危機の主因はそこにあるのではなく、「貨幣が次第に経済生活の主人になってゆく」<sup>12)</sup>こと、鉄道建設を先導とする資本主義化過程に農民経営がひきずりこまれてゆくことであると主張する。思うに、ダニエリソンが税制その他をさしおいて、いわば純経済過程をとりあげたことは、たしかにひとつの進歩である。そして、人民的生産のセクター対資本主義的生産のセクターという対立図式の抽象性は、レーニンの批判したとおりであるにせよ、現物経済の商品経済化という点に資本主義化の前提・基礎を認識しているのは正しい。しかしその反面、農奴制の残基が視界のそとに置かれて、現物経済↓貨幣経済↓資本主義というシエーマだけでロシア経済が分析されることによって、半農奴制的社会のブルジョワ的進化という全体像が、それとともにロシア資本主義の類型的特質の問題が、見失われた。

八〇年代初頭にあられたロシア資本主義没落論が、七〇年代の二つの道の可能性の理論とその性質を異にしていることは、右の説明でほぼあきらかであろう。もつとも、八〇年代前半には没落論が専一的に支配したというわけではなく、二つの道の可能性の思想も生き続けたし、七〇年代末にコヴァレフスキイが共同体崩壊の一般理論を展開し、オルロフがモスクワ県の資料調査にもとづいて共同体の内部分解の真相を報告するなど、ロシア資本主義没落論に逆らう性質をもつた労作があらわれ、ロシア資本主義発展論の成立を準備したことも事実である。<sup>14)</sup>しかし、八〇年代前半において優勢であったのはロシア資本主義没落論であり、それが革命的ナロードニキのロシアの現状

認識を没していった。プレハーンが一八八一年三月一日以降の革命的ナロードニキの混迷状態を打破して革命陣營を再建しようとしたとき、ロシアの経済的現実の認識において徹底的に批判されるべき対抗物は、まさしくロシア資本主義没落論とりわけヴォロンツォフ流の全面的没落論であった。わたくしは次稿において、プレハーンのプロシア資本主義論に進もう。(一九六一年十月五日稿)

(1) 一八〇—一八九〇年代の自由主義ナロードニキの主たる機関誌は「ロシアの聲」『*Pravoe Gorazdo*』で、代表的理論家はウヤロンツォンを筆頭にダニエリソン、レシヤコフ、およびシハイロンスキヤなど。Or. Kapraev, H. O. J. emp. 52-71. Lane, T. H. Von, *The Fate of Capitalism in Russia: the Narodnik Version*, in A. S. E. R. Vol. XIII. N. 1. pp. 11 ff. ただし、シハイロンスキヤは「倫理的社会学」を提唱してマルタス主義を批判したが、ウヤロンツォン流のロシア資本主義没落論には回調せず、「教条主義的ナロードニキ」に対して「批判的ナロードニキ」とも称される特異な存在であった。Lane, op. cit. pp. 15-17. 一八八一年三月一日の事件およびそれにつづく反動体制については荒畑寒村『ロシア革命運動の暁』七四—二八頁。八一年三月以後、革命的ナロードニキがたどった諸方向については、Kapraev, *loc. cit.* pp. 72-80.

(2) ローザ・ルクセンブルグ『資本主義論』第二編一八—二四章はロシア資本主義論争の経済理論の面をとりあつた古典的労作である。ロシア資本主義論争は九〇年代とくに九四—九九年には、合法的出版のワタの拡大と異例の自由のもとで、華やかた展開され、国際的にも注目された。Smkhovitsch, W., *Die sozialökonomischen Lehren der russischen Narodniki*, in *Conrads Jahrbuch*, 1897, SS. 641-78; Stone, N. I., *Capitalism on Trial in Russia*, in *Political Science Quarterly*, 1898, pp. 91-118. はロシア資本主義論争に関するおそろく重要な注目を集めた。現在、ソビエト以外のロシア資本主義論争の研究者としては前述のストーンおよびラウチが注目をされる。ラウチは前記のほか、*Legal Marxism and the "Fate of Capitalism in Russia"*, in *Review of Politics*, Vol. XVIII, Jan. 1956, pp. 23-46. がある。邦語文献とほ前記、山本敏「一九世紀後半のロシアにおける〈資本主義〉論争」『メラス研究』三号(一九五九年)

(3) たとえば、ツオロンツォフとプレハーンとは、互に相反する主張の典拠を、ダニエリソン論文に求めている。プレハーンは『われわれの相違』において「ニコライ・オン(=ダニエリソン)は、わが国の革命家、反動家の全部をあわせても及ば

ぬほど、改革後のわが国の経済につらづく知つてゐる」(T. B. Il'xanov, *Историческое изображение промышленности*, т. 1, стр. 254)と云ふ、マルクスもダニエリソン論文を賞讃した(『マル・エン選集』十三卷、二三三頁)。

- (4) ダニエリソンはその後、一八九三年にこの論文の、紙幅においてはるかに長大な統編を書き、あわせて同名の書物として公刊した。ダニエリソンがはつきりと没落論に移行したのは、九〇年以後であるという説もある(カヲターエフ)。しかし筆者が使用した仏訳本 *Histoire du développement économique de la Russie depuis l'affranchissement des serfs, 1902* の第一部が一八八〇年の原文をいちじるしく改訂したものでないかぎり、一八八〇年論文の骨骨はやはり没落論であるといわねばならない。論文は『資本論』第一部二四章からのかなり多くの引用をふくむが、それは論文の根本的な論点にはあまり関係していない。以下の紹介は右の仏訳本に拠る。山本敏氏の御好意によつて一八九三年版を借覧しえたが一部を参照するにとどまった。ダニエリソンの一八九三年の著書については山本敏氏前掲論文を参照。

(5) (6) *Nicolas-on, op. cit., p. 81.*

- (7) ダニエリソンによれば、一八七一—七八年の穀物収穫量は、各年度ごとの豊凶の差がはげしいが、当期間の前半四年間および後半四年間の平均収穫量をとると、ほぼ相等しい。その間に耕作農民数に変化がなかったものと、播種量は増加しているから、農業労働の生産性は七〇年代の間にむしろ低下したことになる(*op. cit. p. 36-37*)。他方、鉄道の発達と穀物輸出の増大によつて穀物の商品化がすすみ、農民の手もとに残る穀物量は、右の二つの時期の間に一四パーセントだけ減少した(*op. cit. p. 45*)。これが「人民の消費の減退」である。「人民の消費の質の低下」とは、肉類、果物、小麦などが農民の自家消費からとり去られ、農民が馬鈴薯をもっぱら食うようになったことである。この最後の点は、一八九〇年代にマックス・ウエーバーが東エルベの農業労働者について指摘したところと符節を同じくしている。

七〇年代前半と後半との穀物生産量がほぼ同じであったことは、トウガン・バラノフスキイの拠つた資料においても認められる。Vgl. *Tygan-Baranowsky, Geschichte der russischen Fabrik, 1900, S. 378, 381*。および巻末の付表。ただし、ダニエリソンが穀物以外の商業的農産物を視野のそとに置いてゐるのは誤りである。総じて、ダニエリソン論文のもつとも大きい難点は、社会的、分業の進展という視点が欠けてゐることである。

- (8) ダニエリソンがロシア資本主義の失敗を信じる比較史的根拠は、アメリカにおける農・工生産力の並行的な飛躍的増進(一

八七一—九一年の数値は op. cit. p. 86) とは対照的な、ロシアの農業生産力の停滞であった。ダニエリソンは、その原因をロシアにおける中世的遺制に求めず、資本主義と人民的生産との衝突・矛盾に見たのである。

(9) ダニエリソンは、穀物収穫量、鉄道貨物運送量、鉄道会計、信用授受などの各年度ごとの統計表を作成し、結局、ロシアでは穀物収穫の水準が翌年の経済活動の水準を規定するが、ただ鉄道建設だけは、直接にそれに規定されないと述べている。

op. cit. pp. 52-61, および巻末付表 IV。

(10) op. cit. p. 85.

(11) 「われわれは租税が重いことに疑問をさしはさむものではない。……土地の純収入にかけられる租税は、純収入の二倍に達しやえしよせ」(op. cit. p. 43) しかし「税制の改革は、すべての経済的害悪に対する万能薬ではけつてなう」(op. cit. p. 88)

(12) op. cit. p. 44.

(13) ただし、ダニエリソンは註(7)において指摘したように、社会的分業の視点を十分に保持していないために、現物経済↓商品経済↓資本主義という系列的進化が、現物経済対商品経済・資本主義という空間的対立に転化される偏向をもっている。そして、「共同体のなかにさえ注目すべき現象があらわれている。ほとんど農業労働にたずさわらない成員には、共同体は劣悪な分与地を与え、分与地の割りかえ期限は……ますます長くなり、われわれは集団的土地所有の個人的土地所有への転化の進行を目撃するほどなのである」(op. cit. p. 81) という共同体の危機(農民層分化ないし分解)の事実認識も、たんなる指摘に終わり、この現象こそ資本主義がロシアに確乎たる根を張りつつある証拠とは考えられなかったのである。

(14) Коваленский, М., Обширное Землевание, причина, ход и последствия его разрастания, ч. I, 1879. Опубл. Собрания статистических сведений по Московской губ., Отдел хозяйственной статистики, т. IV, выпуск I, Москва, 1879. 中村義和氏訳掲第一論文を参照。